

第4学年 国語科学習指導案

1. 単元 学習したことを生かして
「ごんぎつね」 関連教材「おにたのぼうし」

2. 指導の考え方

○ 子どもの実態

本学年の子どもたちは、これまでに「三つのお願い」「白いぼうし」「一つの花」の学習を通して、読みのめあてに沿って、人物の気持ちや人柄を読み取る学習をしてきている。その中で、各場面で中心となる文を基に、情景を想像しながら人物の気持ちや人柄を考える読み方を身に付けている。しかし、根拠とする叙述をはっきりさせることはできても、その叙述からどのように考えたか自分なりに解釈することや、場面と場面をつないで読むことは、まだ十分とは言えない。

「関連づけて読む」活動については、「白いぼうし」と同じシリーズの関連教材「春のお客さん」を比べて読み、運転手松井さんのどんなお客さんに対しても変わらぬ相手のことを思いやる関わりぶりから、優しい人柄について読み深めた。具体的には、子どもや大人だけでなく、たぬきにも優しい松井さんの人柄に対する見方・考え方を深めることができた。

○ 教材の価値・特質

教科書教材は、いつもひとりぼっちで生活していたごんが、自分と同じひとりぼっちになった兵十に自分の存在に気付いてほしい、兵十と分かり合いたいと願う一途な姿を描いている物語である。

文章構成の特質としては、6つの場面で構成されていて、「いたづらをするごん」「反省し後悔するごん」「つぐないをくり返すごん」「兵十の後をついていくごん」「兵十に気付いてもらっていないことを知ったごん」「兵十にうたれるごん」と展開していく。その中で、ごんの言動に着目し、ごんの気持ちを読み取ることによって、その奥底にあるごんのひとりぼっちのさみしい心の中身を読み確かめることができる教材である。

文章表現の特質である、心内語や類義語、繰り返しの表現、文末表現などを基に、登場人物の気持ちの動きや、登場人物同士の関係を読み取り、場面をつないで物語全体を貫いている主人公の心を読み確かめるのに適した教材であると言える。

関連教材「おにたのぼうし」は、恥ずかしがり屋で気のいい鬼のおにたが、人間のためにいろんないいことをするが分かってもらえない話である。自分に気付いてほしい、悪い鬼ばかりではないことを人間に分かってほしいと願い、一生懸命に行動するが、最後まで分かってもらえないおにたのさみしい心を読むことができる物語である。「ごんぎつね」と比べて読むことで、お互いが分かり合い、心を通い合わせることの難しさとその大切さについて考えるのに適した教材である。

○ 指導にあたって

読みのめあて

人物が題名に取り上げられていることから、人物そのものが大きな役割を担っていることをふまえ、「ごんぎつねがどんなことをするのだろう。」「特別なきつねなのだろうか。」ということ意識しながら冒頭を読んでいく。冒頭では、語り手が小さいときに聞いた話を数十年たった今でも忘れずに人々に伝えていることをおさえ、題名での疑問とつなぎ、そこまで語り手の心に残ったものは「ごんぎつね」の話の何なのかという読みのめあてを生み出す。

予見

読みのめあてに沿って全文を読み、ごんの行動を追っていくことで、「語り手である『わたし』の心に残っているのは、ごんのひとりぼっちのさみしい心である。」という予見を書きまとめる。そして、各自の予見を交流し、読み取ったことの共通点や相違点を明らかにして、学級の予見を方向付ける。

学習計画

予見を方向付ける際に、「わたし」の心の中に残っているのは、ごんぎつねのどんなさみしい心なのか、確かに読み取れていなかったことや、もっと詳しく知りたいことを明らかにし、各場面のごんの気持ちを読み取るのに手がかりとなる中心文から何を読み確かめていけ

ばいいのかを考え、学習計画を立てる。

読み深め・確かめ

学習計画に沿って、場面ごとに立ち止まる中心文を基に、ごんの気持ちを読み取り、ごんのひとりぼっちのさみしい心の中身を読み確かめていく。ここでは叙述を基に、ごんの気持ちの動きとその奥底に貫かれているひとりぼっちのさみしい心の中身を読み確かめる。

読み・読み方のまとめ

題名にもどり、人間である兵十に対し、ごんが「きつね」であるという宿命を背負っているということに気付かせる。その上で、ごんがどんなことをしても死をもってしか分かってもらえず、ひとりぼっちのさみしい心のままであったことが語り手の心に残ったという読みをまとめる。さらに、ごんの気持ちの動きや、ごんと兵十の関係を読み取り、ごんのさみしい心の中身を読み確かめるために、心内語や類義語、繰り返しの表現、文末表現などを読む読み方を使ったことについてまとめる。

「関連づけて読む」活動

兵十と分かり合いたいと願ったが、死をもってしか気付いてもらえなかった「ごんぎつね」と、「おにたのぼうし」を関連づけて読むことによって、お互いが分かり合い、心を通い合わせることの難しさとその大切さについての見方・考え方を深める。

3. 単元の目標

- 同じひとりぼっちと思い込み、兵十になんとか自分の存在に気付いてほしい、分かり合いたいと願ってつぐないをくり返したにもかかわらず、死をもってしか分かり合うことができなかったごんのひとりぼっちのさみしい心を読み取ることができる。
- 中心文を基に、場面と場面をつないで人物の気持ちの変化を読み取ったり、類義語や文末表現に着目して人物の気持ちを読み取ったりする読み方を身に付けることができる。
- 死をもってしか気付いてもらえなかった「ごんぎつね」と、「おにたのぼうし」を「関連づけて読む」ことによって、お互いが分かり合い、心を通い合わせることの難しさとその大切さについての見方・考え方を深めることができる。

4. 学習計画（全19時間）

過程	時	主な学習活動と内容	指導上の留意点 (◎基礎・基本の重点、※「関連づけて読む」活動に関して)
読 み の め あ て	1	1 単元名から学習の構えをもつ。 2 題名から考えたことや疑問に思ったことを出し合う。 ○ 題名が人物の名前になっていたときの題名の働きをとらえること 3 題名と冒頭をつないで読み、読みのめあてを生み出す。 ○ 語り手が登場して、長い間語り継がれている意味をとらえること	○ きつねについてのイメージを出させ、マイナスのイメージが強いことに気付かせておく。 ○ 語り手が小さいときに聞いた話なのに、今も忘れられずにいることに着目させる。
		【読みのめあて】 語り手のわたしは、「ごんぎつね」のお話の何が強く心に残っているのだろう。	
予 見	2 3	1 読みのめあてに沿って全文を読み通し、予見を書きまとめる。 3 (1) 一行空きと挿し絵を手がかりにし、ごんの言動を中心にあらすじをとらえる。 (2) 各場面でのごんの言動と気持ちを書きまとめる。 (3) 各場面のごんの気持ちをつないで、語り手の心に残ったものを自分の予見として書きまとめる。	○ 一行空きと挿し絵を手がかりにすることで、全文が6つの場面に分けられることに気付かせる。 ○ 各場面でのごんの言動にサイドラインを引かせ、そこから分かるごんの気持ちを書き込ませる。

		2 個人の予見を交流し、予見を方向付ける。	
		[予見の方向] 語り手のわたしは、ごんのひとりぼっちのさみしい心が心に残った。	
学 習 計 画	4	1 各場面で何を読み確かめていくのかを確認し、学習計画を立てる。 (1) 各場面の中心文を決める。 (2) 中心文を基に、何を読み確かめていくのか話し合う。	○ 予見の違いから、根拠となる叙述の重なりや違いを整理させ、中心文から何を読み確かめていくのかはっきりさせる。 ○ どの叙述を中心に何を読み確かめるのか、学習計画表として掲示する。
		[学習計画] ① いたずらばかりするごんの様子から、ごんのひとりぼっちのさみしい心確かめる。 ② ほらあなの中で考えるごんの様子から、ごんのひとりぼっちのさみしい心確かめる。 ③ 「おれと同じ、ひとりぼっちの兵十か。」と思うごんの様子から、ごんのひとりぼっちのさみしい心確かめる。 ④ つぐないをくり返すごんの様子から、ごんのひとりぼっちのさみしい心確かめる。 ⑤ 「～引き合わないなあ。」と思うごんの様子から、ごんのひとりぼっちのさみしい心確かめる。 ⑥ ぐったりと目をつぶったまうなずいたごんの様子から、ごんのひとりぼっちのさみしい心確かめる。	
読 み 深 め ・ 読 み 確 か め	5 6	1 いたずらばかりするごんの様子から、ごんのひとりぼっちのさみしい心を読み確かめる。 (1) ごんの生活の様子について話し合う。 ○ 家族や友達がなく、ひとりぼっちで生活していることに気付くこと ○ いたずらをくり返す理由についてとらえること (2) いたずらとひとりぼっちで生活していることをつないで話し合う。 2 読み確かめたことをもとに、自分の読みに付け加わったことを書きまとめる。	○ ひとりぼっちのごんの生活の様子や状況を想像させ、いたずらをくり返す理由や気持ちを考えさせる。 ◎ いたずらの中身を話し合うときに、「ほり散らしたり」「むしり取って」の言葉に立ち止まらせ、「ほったり」「むしったり」と比べさせることで、ごんのいたずらが、どれほどひどいものだったのか、村人の立場からも考えさせる。 ○ 家族や友達がなく、ひとりぼっちで生活していることと、くり返しするいたずらをつないでごんのひとりぼっちのさみしい心の中身を書きまとめさせる。
			ひとりぼっちのさみしさを紛らわすため、村中の話題になって、自分に関心をもってほしいと思うごんのひとりぼっちのさみしい心。
7 8	1	ほらあなの中で考えるごんの様子から、ごんのひとりぼっちのさみしい心を読み確かめる。 (1) うなぎのいたずらについて話し合う。 ○ ごんにとっては今までのいたずらと同じであることをとらえること (2) うなぎのいたずらだけを反省している理由について話し合う。 ○ 叙述とつないで、兵十をひとりぼっちにしてしまったというごんの思い込みであることをとらえること 2 読み確かめたことをもとに、自分の読みに付け加わったことを書きまとめる。	◎ 「～ちがない。」「～だろう。」という文末の言葉に立ち止まらせ、ごんが思い込みで反省し、後悔し始めていることに気付かせる。 ○ 「おっかあ」という言葉が繰り返されていることに気付かせ、兵十をひとりぼっちにさせてしまったというごんの気持ちが強く表れていることに気付かせる。 ○ 思い込みと前場面のごんの気持ちをつないで、ごんのひとりぼっちのさみしい心の中身を書きまとめさせる。
			自分が今までひとりぼっちでさみしくてたまらなかったから、兵十をひとりぼっちにしてしまったのは自分だと思い込むごんのひとりぼっちのさみしい心。

9	<p>1 「おれと同じ、ひとりぼっちの兵十か。」と思うごんの様子から、ごんのひとりぼっちのさみしい心を読み確かめる。</p> <p>(1) 何が同じなのか話し合う。</p> <p>○ おっかあがいないことは同じであるが、ごんはきつねで兵十は人間であることや、兵十には友達や村人がそばにいたことが違って、ごんの思い込みであることをとらえること</p> <p>(2) 文末からごんの気持ちを話し合う。</p> <p>○ 文末「か」に込められた後悔している気持ちをとらえること</p> <p>2 読み確かめたことをもとに、自分の読みに付け加わったことを書きまとめる。</p>	<p>○ 兵十の位置・距離を読み取り、ごんが兵十のそばに近付いていることに気付かせる。</p> <p>◎ 読点を読み、ごんが兵十のことを自分と同じ境遇だと強く思い込み、確信したことを読み取らせる。</p> <p>◎ 「ひとりぼっちの兵十か。」の文末を読み、ひとりぼっちにさせたことが自分であることを確信し、後悔しているごんの気持ちを読み取らせる。</p> <p>○ 話し合ったことをもとに、ごんのひとりぼっちのさみしい心の中身を書きまとめさせる。</p>
<p>ごんは、おっかあがいないことを何よりもさみしいと思っている。だから、おれと同じだと言い、おっかあが死んだのは自分のせいだったと確信した。でも、兵十にはおっかあがいなくても、友達や村人がそばにいてくれるが、ごんには誰一人そばにいてくれる人がいない。それなのに、兵十と自分を同じだと勘違いするごんのひとりぼっちのさみしい心。</p>		
10 11	<p>1 つぐないをくり返すごんの様子から、ごんのひとりぼっちのさみしい心を読み確かめる。</p> <p>(1) 兵十に何度もくりや松たけを持って行ったごんの気持ちを話し合う。</p> <p>○ くり返すつぐないに出かけていることをとらえること</p> <p>(2) つぐないをくり返す理由を話し合う。</p> <p>○ つぐないの中身が変わっていったことをもとに、ごんの気持ちが、兵十に自分の存在に気付いてほしい、自分の思いを分かかってほしいという気持ちに変化していることをとらえること</p> <p>2 読み確かめたことをもとに、自分の読みに付け加わったことを書きまとめる。</p>	<p>○ 「次の日も、その次の日も～」や「まず一つ」を基に、一生懸命つぐないを続けるごんのさみしい気持ちを考えさせる。</p> <p>◎ 「持ってきてやりました。」と「いきました。」を比べ、つぐないを続けながらも、兵十の気持ちを変えたいと思うごんの様子に気付かせる。</p> <p>○ いわし→くり→松たけとつぐないの内容が少しずつ変化していることから、ごんの兵十を思う気持ちも変化していることに気付かせる。</p> <p>○ 話し合ったことをもとに、ごんのひとりぼっちのさみしい心の中身を書きまとめさせる。</p>
<p>うなぎのつぐないが、なんとしても自分の存在と思いを分かかってほしい、兵十の気持ちを変えたいという思いに変わり、つぐないをし続けるごんのひとりぼっちのさみしい心。</p>		
12 13	<p>1 「～引き合わないなあ。」と思うごんの様子から、ごんのひとりぼっちのさみしい心を読み確かめる。</p> <p>(1) 兵十と加助の後をつけていくごんの様子を話し合う。</p> <p>○ 兵十とごんの距離が近くなっていることをとらえること</p> <p>(2) 「～引き合わないなあ。」と思うごんの気持ちを話し合う。</p> <p>○ 自分のつぐないに気付いてもらえず落ち込むごんの気持ちを想像すること</p> <p>2 読み確かめたことをもとに、自分の読みに付け加わったことを書きまとめる。</p>	<p>○ 兵十の後をつけるごんの様子から、兵十のそばに行き、兵十が自分のことに気付いているかもしれないと期待しているごんの様子を読み取らせる。</p> <p>○ 「こいつは」の指している内容を考えさせる。</p> <p>◎ 「おれ」の繰り返しから、自分に気付いてもらっていなかったことに落胆しているごんの様子に気付かせる。</p> <p>○ 話し合ったことをもとに、ごんのひとりぼっちのさみしい心の中身を書きまとめさせる。</p>
<p>自分に気付いてほしいと期待していたのに、兵十に気付いてもらってなかったことが分かり、期待が裏切られ、がっかりしているごんのひとりぼっちのさみしい心。</p>		

<p>14 15 【 ○ 組 本 時 】</p>	<p>1 ぐったりと目をつぶったままうなずいたごんの様子から、ごんのひとりぼっちのさみしい心を読み確かめる。</p> <p>(1) ぐったりと目をつぶったままうなずいたごんの気持ちを話し合う。</p> <p>○ ごんがうなずいた気持ちをとらえること</p> <p>(2) 青いけむりが、まだつつ口から細く出ていたときの、ごんの様子と兵十の気持ちを話し合う。</p> <p>○ 今にもごんの命が消えそうなことをもとに、死をもってしか気付いてもらえなかったごんのひとりぼっちのさみしさと、自分の手でうってしまった兵十の後悔を、兵十が引きつぐであろうことをとらえること</p> <p>2 読み確かめたことをもとに、自分の読みに付け加わったことを書きまとめる。</p>	<p>◎ ぐったりと目をつぶったままうなずいたごんの気持ちを、引き合わないなあと思ったのに、明るく日も兵十の家に出かけたことや、今までと違って家の中に入ってくりを固めて置いたことを、前場面までの読み取りとつないで考えさせる。</p> <p>○ 青いけむりが出ている間にごんの頭の中には、兵十への今までの思いが思い出されていることを想像させる。呼称の変化から、兵十に自分の存在にやっと気付いてもらったものの、ごんの死が迫っていることに気付かせる。</p> <p>○ 兵十が驚き、後悔している様子を想像させ、ごんのひとりぼっちのさみしい心の中身を書きまとめさせる。</p>
<p>死をもってしか兵十に気付いてもらえなかったごんのひとりぼっちのさみしい心。兵十は、自分の手でうってしまった後に、ごんのひとりぼっちのさみしい心に気づき、取り返しのつかないことをしたことを後悔し続けるであろう。ごんと兵十、両者の心が通い合うことのなかった切なさ、やるせなさが語り手の心に残った。</p>		
<p>読み・読み方のまとめ</p>	<p>16 1 読みのまとめをする。</p> <p>2 読み方のまとめをする。</p> <p>○ 言葉をはずして読む</p> <p>○ 似た言葉と比べて読む</p> <p>○ 繰り返しを読む</p> <p>○ 場面と場面をつないで読む</p> <p>○ 文末表現を読む</p>	<p>○ ごんのひとりぼっちのさみしい心の中身がどのように詳しくなったのか、確かめたことと題名をつないで読みのまとめをする。</p> <p>◎ 学習した読み方を振り返って、「読み方の種」としてまとめていくことで、これからの学習に活用することができるようにする。</p> <p>※ 他にも物語を貫いている主人公の心が分かる物語はないのか問題意識をもたせ、関連教材につなぐ。</p>
<p>関連づけて読む 【 ○ 組 本 時 】</p>	<p>17 1 読みのまとめでもった問題意識とつないで、主人公の心や、心の通い合いについて考えていくことを確認する。</p> <p>18 2 関連教材「おにたのぼうし」を読む。</p> <p>19 3 書き込みをし、「おにたのぼうし」のどの叙述を中心に読んでいくのかを話し合う。</p> <p>4 「おにたのぼうし」のおにたのさみしい心を読み取り、「ごんぎつね」と比べて読むことで心の通い合いについて考える。</p>	<p>※ 「ごんぎつね」のように、物語の中に貫かれているものがおにたのどんな心かを読んでいくことに気付かせる。</p> <p>○ おにたの言動を読んでいくことで、一生懸命頑張っても最後まで人間に気付いてもらえない、分かってもらえないさみしい心をとらえさせる。</p> <p>※ 2つの教材を読み比べることで、お互いが分かり合い、心を通い合わせることの難しさと大切さについての考えを深めさせる。</p>

第4学年〇組 (公開授業〇)

5. 本時 (19 / 19) 関連づけて読む

6. 本時の目標

- 主人公であるおにたの言動から分かってもらえないさみしい心を読み取り、「ごんぎつね」で学習したことと関連づけて読むことによって、分かり合うこと、心を通い合わせることについての見方・考え方を深めることができる。
- 場面と場面をつないで読んだり、繰り返しの表現を読んだりすることによって、人物の気持ちの動きをとらえる読み方を活用することができる。

7. 本時指導の考え方

前時までに、子どもたちは、「ごんぎつね」で、なんとか兵十に自分の存在に気付いてほしい、兵十と分かり合いたいと願うが、死をもってしか気付いてもらうことのできなかつたごんのひとりぼっちのさみしい心を読み確かめている。

本時は、自分の存在に気付いてほしい、誰かと分かり合いたいと願い行動したが、誰にも分かってもらえなかつたおにたのひとりぼっちのさみしい心を読み取り、「おにたのぼうし」を「ごんぎつね」と比べることによって、分かり合うこと、心を通い合わせることの難しさと大切さについての見方・考え方を深める学習である。

そのために、まず、前時の書き込みをもとに、おにたのさみしさが分かる中心文である「おにだって、いろいろあるのに。おにだって……。」の叙述から、どんなに頑張っても鬼というものを、悪いものとしか思ってくれないと分かったときのおにたの気持ちについて考えさせる。そして、その後「氷がとけたように、急におにたがいなくなりました。」の叙述と、まだあつたかい黒い豆だけが残されていたというところから、女の子のために豆を残して突然いなくなってしまうおにたのさみしい心について考えさせる。次に、おにたの姿と、死をもってしか気付いてもらえず、分かり合うことのできなかつたごんの姿とを比べて読むことで、お互いに分かり合うこと、心を通い合わせることの難しさと大切さに気付かせる。最後に、「おにたのぼうし」で読み取ったおにたのさみしい心と、「ごんぎつね」と比べて読むことで分かった、心の通い合いについて書きまとめさせる。

8. 板書計画

学習したことを生かして
学習のめあて
「ごんぎつね」と「おにたのぼうし」をくらべて読み、心の通い合いについて考えよう。

ごんぎつね

ごんを、ドンとうちました。

「ごん、おまいだったのか、いつも、くりをくれたのは。」

ごんは、ぐつたりと目をつぶったまま、うなずきました。

やつと気付いてくれた。兵十が「ごん」と呼んでくれてよかった。なぜもうちょっと早く気付いてくれなかったのかな。お別れだよ。さみしいよ。

青いけむりが、まだつつ口から細く出ていました。

おにたのぼうし

(おにもいろいろあるのにな。)

「だつて、お七が来れば、きっとお母さんの病気が悪くなるわ。」

おにたは、手をだらんと下げて、ふるふるつと悲しそうに身ぶるいして言いました。

くりかえしを読む

「おにだつて、いろいろあるのに。おにだつて……。」 どうして決めつけるんだらう。やつと友達になれると思つたのに。ぼくは悪いおにじゃないのに。ぼくは一人ぼっちだ。さみしいよ。

氷がとけたように、急におにたがいなくなりました。

もうここにはいられない。さようなら。きみは分かつてくれると思つたのに。

黒い豆！まだあつたかい・

最後に気付いてもらえたがひとりぼっちで死んでいくさみしさ

最後に分かってもらえなかつたさみしさ

学習のまとめ

分かり合うこと・心を通い合わせることのむずかしさ

大切さ

自分の存在に気付いてほしい、人間と分かり合いたいとどんなにがんばつても、鬼は悪いものとしか思つてもらえなかつたおにたのさみしい心が分かつた。「ごんぎつね」と「おにたのぼうし」を比べて読み、お互いが分かり合い、心を通わせることがとても難しいことだと、それが大切なことだということが分かつた。

9. 本時の展開

学習活動と内容	指導上の留意点（※「関連づけて読む」活動に関して）
<p>1 本時学習のめあてを確かめる。</p> <p>〈学習のめあて〉</p>	<p>※ 前時までに学習したことをもとに、おにたのひとりぼっちのさみしさについて読み取り、心の通い合いについて考えていくことを意識付ける。</p>
<p>「ごんぎつね」と「おにたのぼうし」をくらべて読み、心の通い合いについて考えよう。</p>	
<p>2 前時の書き込みをもとに、おにたの気持ちを考え、話し合う。</p> <p>(1)「おにだって、いろいろあるのに。おにだって……。」の叙述からおにたの気持ちを考える。</p> <p>○ おには悪いと決めつけられていることに対するさみしい心をとらえること</p>	<p>○ 前時の書き込みをもとに発表し合い、友達の読みと比べながら、おにたのさみしい心を読み取らせる。</p> <p>○ 前場面の心内語（おにもいろいろあるのにな。）とつないで考えさせる。</p>
<p>・ やっぱり鬼は悪者だと思われているんだ。どうして決めつけるんだろう。 ・ ぼくは悪い鬼じゃないのに。</p> <p>・ ぼくたちはお母さんの病気を悪くなんかしないのに。 ・ やっと友達になれると思ったのに。</p>	
<p>(2)「氷がとけたように、急におにたがいなくなりました。」の叙述と、まだあったかい黒い豆が残っていたところからおにたの気持ちを考える。</p> <p>○ さよならも言えないほどさみしくなったおにたの気持ちを考えること</p> <p>○ 分かってもらえなくても最後まで女の子に優しいおにたの気持ちを考えること</p>	<p>○ 最後まで女の子を喜ばせたいと思いながらも、何も言えずに去っていったおにたのさみしい心を読み取らせる。</p>
<p>・ もうぼくはここにいられない。さようなら。 ・ きみはぼくのこと分かってくれと思ったのに。</p> <p>・ お母さんのために豆まきをしてあげて。黒い豆をおいていくよ。 ・ ぼくが黒豆になってあげるよ。</p>	
<p>3 二つの作品を比べて見つけた共通点から分かったことについて話し合う。</p>	
<p>「ごんぎつね」のごんも、「おにたのぼうし」のおにたも自分のことに気付いてほしい、だれかに分かってほしいと思ってるんなことをした。でも、分かり合って友達になれなかった。どちらも最後まで分かり合うことができなくてさみしかった。お互いが、分かり合うことがむずかしいことが分かった。</p>	
<p>4 本時学習のまとめをする。</p> <p>(1) 読み取ったおにたのさみしい心と、心の通い合いについて分かったことを書きまとめる。</p>	
<p>自分の存在に気付いてほしい、人間と分かり合いたいとどんなに頑張っても、鬼は悪いものとしか思ってもらえなかったおにたのひとりぼっちのさみしい心が分かった。「ごんぎつね」と「おにたのぼうし」を比べて読むことで、お互いが分かり合い、心を通い合わせることは、とても難しいことと大切であることが分かった。</p>	
<p>(2) 読み取ったことを発表する。</p>	<p>※ 板書をもとに、おにたのひとりぼっちのさみしい心についてと、「ごんぎつね」と「おにたのぼうし」を比べて分かったことについて書きまとめさせる。</p>

9. 本時の展開

学習活動と内容	指導上の留意点(◎基礎・基本の重点)
<p>1 本時学習のめあてを確かめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 学習計画を基に、ごんのひとりぼっちのさみしい心につながる言動を詳しく読んでいくことを確認する。 <p>〈学習のめあて〉</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 前時までの掲示物を用いて、これまでの内容を振り返り、本時学習の見通しをもたせる。
<p>ぐったりと目をつぶったままうなずいたごんの様子から、ごんのひとりぼっちのさみしい心を読み確かめよう。</p>	
<p>2 ぐったりと目をつぶったままうなずくごんの気持ちを話し合う。</p> <p>(1) ぐったりとしながらもうなずいたときのごんの気持ちを考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 兵十への思いが通じていないことを知った夜にほら穴で考えたこと、明るく日もつぐないにいったことからごんの気持ちの強さをとらえること ○ 前場面までとつぐないの仕方がちがうことからごんの気持ちの強さをとらえること <ul style="list-style-type: none"> ・ 言葉ははずして読む 「土間にくりが（固めて）置いてあるのが～」 (2) 兵十にうたれたときのごんの気持ちを考える。 ○ 兵十に初めて「ごん」と呼ばれたことから、やっとごんの願いが叶ったことをとらえること <ul style="list-style-type: none"> ・ 呼称の変化を読む 「あのごんぎつねめ」→「ごん」 <p>3 青いけむりが、まだつつ口から細く出ていたときのごんの様子や兵十の気持ちについて話し合う。</p> <p>(1) ごんの様子について話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ やっと兵十への思いが通じたものの、ごんの命が今にも消えそうなことをとらえること (2) 兵十の気持ちについて話し合う。 ○ 「～ばかりと取り落としました。」の叙述を基に、自分の手でうってしまったことを後悔していることをとらえること <p>4 本時学習のまとめをする。</p> <p>(1) 読み確かめたごんのさみしい心を書きまとめる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 前時の書き込みをもとに、自分の考えとの共通点や相違点を明らかにしながら、話し合いを進めていくことを確認する。 ◎ 前時までに話し合ったことや、一行空き、つぐないに行くごんの様子、つぐないの仕方を前時と比べて、その意味をとらえ、ごんの兵十への強い思いに気付かせる。 ◎ 兵十のごんに対する呼び方が今までと違うことに着目させる。 ○ 「ごん、おまいだったのか。」と声をかけられ、ごんにとっては、願いが叶ったことを確認する。 ○ 叙述から、ごんの死が迫っていることに気付かせる。その際、ごんの頭の中には、兵十への今までの思いが思い出されていることを想像させる。 ○ 自分の手でうってしまった兵十の後悔を、兵十が引きつぐであろうことをとらえさせる。 ○ 板書を見ながら、話し合ったことをつなぎ、語り手の心に残ったものを自分の言葉で、ごんのひとりぼっちのさみしい心として書きまとめさせる。
<p>やっと自分に気付いてもらったごんだったが、死をもってしか兵十に気付いてもらえなかったごんのひとりぼっちのさみしい心。兵十は、自分の手でうってしまった後に、ごんのさみしい心に気付き、取り返しのつかないことをしたことを後悔し続けるであろう。ごんと兵十、両者の心が通い合うことのなかった切なさ、やるせなさが語り手の心に残った。</p>	
<p>(2) 読み確かめたことを発表する。</p> <p>(3) 本時で使った読み方をまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 場面と場面をつないで読む ○ 呼称の変化を読む ○ 言葉ははずして読む 	<ul style="list-style-type: none"> ◎ 本時で使った読み方を振り返り、「読み方の種」としてまとめる。

